# 新年文芸

## 短歌　近作五首

十二分会　町　佳郎

みたびなる選挙も終りにぎわえる師走夜の街妻に従きゆく
遠く住む姉の病いを気づかいし日々過ぎてわがめぐりにも暮れの
　迫りぬ
いささかの幸ということばも反趨す移り住みて七とせの元朝の空
はは逝きて賀状出ださざりし元日を妻とみたり子つつましくおり
気負いなどあらず日々に歌詠みて歩まんと思う四十五の初春

退職者　木村　守

みなおもい思いに運び来し嗜好カッポ酒酌む座に開きたり
カッポ酒賞味の酔いのほのぼのしみかんの丘に碧き空見き
金持ちが金ひけらかすコンクリート塀建て陰の野菜ふとらぬ
一輪車に押して掘り来し大根を切干して蔵う掌に軽き量
降りたくて降りし筈なる冬鳥のわれの動けば忽ちに逃ぐ

退職者　高椋龍生

銃弾にはた落盤に斃れたるともありわれの老後は淋し
子や孫に語り継がなんいまをこそ核反対より生きる道なし
沖縄と北海道見てこのあとの善光寺詣り妻と語らふ
庭に来るヒタキよ鵜(つぐみ)目白よとひと日見飽かずわれの老後は
落葉せしうめもどきの実てらてらと鵯(ひよ)の貪慾許してをりぬ

退職者　中尾種夫

久に来し松原櫨燃えて能古島見ゆ渚に立てば
腕組みて徹夜せし日よ潔よく職去る友に捧ぐる敬意
慰さめの言葉知らねば頭下げて通り過ぎたり老いし遺族に
青史に刻む永き厳しき闘いを妻と誇りぬ貧しけれども
柳川は白秋の里、帰去来の詩碑にたたずむ吾れは旅人

## 詩　三池へいくとき

新潟　かなやま　つる

あなたは三池を知っていますね
炭坑節で有名なあの三池を知っていますね
でも　あの炭坑節の三池はいいことばかりで
ほんとうの三池は別のもの

月までとどく煙突の高さより深く
海底に掘り進んだ三池炭鉱を知っていますか
とても暗い地底の仕事は
どんな仕事より汗が流れ
どんな仕事より力がいる
その　もっとも大事なことはいいかげんにして
だまって働くものを雇い入れた
三井三池のことを知っていますか

そのむかし　囚人を働かせ
朝鮮人強制労働をさせ
カンバツにたおれた沖縄の小さな島の人たちを
ただ同然に使って
会社だけがまるまるとふとっていった
三井三池のことを知っていますか

一年に何十人もの人が死ぬ
それが　ざっとした数であって
ほんとうは何人死んだのか
すか
世界にひびいた労働者の歌声
日本中の働くものが手をとり合った
『三池闘争』のことを知っていますか
正しいことは正しいと
おれたちも人間なんだと　こぶしふりあげた
勇気ある労働者のいる
三池炭鉱労働組合を知っていますか

けれど立ち上がった労働者をたたき
かたいスクラムをごぼうぬきにして
「おれの言うようにすれば悪いようにはしない
　ぜ」と
スゴ味をつけて労働者を分断した資本家のいる
三井三池炭鉱のことを知っていますか

「でもそれは過ぎたむかしのこと　特別の炭鉱
　の話じゃないか……」というのですか

『アナタハ三池ヲ知ロウトシナイ
　アナタハ自分ヲアキラカニ見ヨウトシナイ
　アナタハ自分ノ恥部ニ触レヨウトシナイ
　アナタハ真実ヲ知ルノガオソロシイ
　アナタハタタカウコトガコワイ』

人が三池へ行くとき
体をつきぬけてこみあげるのは
日本労働者に共通の怒りであり
世界の人間に通ずる怒りなのです
労働者は資本と闘わなければ生きていけない
世界の
日本の　そして
三池の歴史にそう記されてあるのです

## 俳句

四分会　村中利行

働いた肩動くほど寒い月
地下三千尺上り坑夫の仰ぐ寒灯
時雨残照多良岳海へおとす虹
時雨ゆき船の灯の濃く点滅す
小春日和の露路へビラ昼餉におう

退職者　高椋龍生

ひらけくる未来ありけり初日記
ボーナスのなき正月を迎えけり
六人の孫に囲まれ屠蘇うくる
ほうたんの芽にある玉の日和かな
日本のこころに紙の漉き上がる

## 川柳

退職者　山下みのる

少年の誇り理想を語るとき
この辺で盃伏せるマイペース
人はもう消耗品でない平和
年賀状師のおとろえぬ筆のあと
うたもよし日もよし揺れる角かくし
風吹けば風の音譜を作る松
長生きの秘訣ともかく笑うべし

## 狂句

退職者　佐藤勉

さわやかにサンタモニカの風が吹く
車座で鉄砲傷が唄わする
その昔こま遊びの日の遠くなり
秋高くまたずれ起こす阿蘇ん牛
ひっかかりがけでミイラになっとった

## 詩

九分会　平田光男

偶然にも
二人して勤めを休んだ
夫婦連れでポイント
妻と
私は
子供に専門学校を卒えさせるために
懸命なのだが
そう若くない二人には
満勤などできるものではない

久し振りに
連れ立って

## 園芸随想　市の木・市の花　制定に思う

十四分会　田上　勇

各県や都市はもちろん町村にいたるまで、その地域に合った木や花を制定し、美化運動を行なっています。

都市化が進み、街並みもコンクリーの壁から舗道まで地表面は見あたらず、道路は交通戦争の場と化し、明るさのない殺伐とした風景に変わり、形を変えた砂漠にも似た感じがします。

その中で花や緑は私たちに言いしれぬ安らぎと色彩感と美的感受性を与えてくれます。このような花や木を私たちの生活に生かさない理由はなく、人間の美的感覚を行使するのもまた当然のことでしょう。

大牟田でも昨今、「市の木」、「市の花」制定委員会を作り、公園や街路、家庭に愛されるものを決めようと応募を受け付け、「市の木」にクヌギ、「市の花」に山椿の花を決めました。これに対しサツキ愛好会から、花の部の投票はサツキが最高であったにもかかわらず、投票の少ない椿に決まったのはなぜか？との質問が出されました。その後どうなったか知る由もありませんが、これは「我田引水」の感がしないでもありません。

私は各地を旅する機会に各地の街並みに植えてある植物を目にしますが、それぞれの街並みを美しく手入れし、色どりをそえ、その町の美化にかける意欲がうかがえて、すがすがしい気持になります。

今、大牟田の公園や街路には、シャリンバイやアベリアなどが植えられていますが、手入れは今一歩という感じで、市民で作っている花一ぱい運動の花壇も心ない人に荒されたり、水分不足で枯死したりで、せっかくの試みも台なしのようです。市に本気で取り組む姿勢があるなら、数人の街路美化員でも置いて整備したらと思うのですが――。「木と花」制定委員会も専門家の方の意見なども聞き、十分な討議がされたのかどうか？私はこの点で不十分さがあったのではなかろうかと考えています。

二男が研修のためにカナダに行った時の話ですが、わずかな日数のことで全体ではないにしても道路以外はほとんど緑のジュータンを敷きつめたようだったとのことです。つまり舗装道路以外はすべて芝生が植え付けられて、見事に手入れが行き届いており、それに街中にタバコの吸いガラはおろか、チリ一つ落ちてなく、すばらしい所だったというのです。

もちろん凍土を防ぐなどのために考え出された美意識からのものと思われますが、要はその後の管理が大切なのです。少くとも市民全体のものとなり、一丸となって取り組めるように、お役所仕事にはしてほしくないのです。たとえよその地方の花や木と同じになっても――。

新たな装いの延命公園。体育館前に植え込まれた「やぶつばき」

## 随想　思い出

大阪　興梠はつえ

九月二十五日から二十六日の近畿周辺在住者の第二回馬渡会琵琶湖一泊旅行のときの写真が、末吉さんと緒方さんから数葉ずつ送られてきましたので、早速お二人にお礼の電話をしました。

緒方さんが、今回も百通近いお便りと写真を送られていると聞いていましたので、送料の一部にでもと記念切手二十枚を送ったところ、『お気持だけいただきます。馬渡地域ではお世話になり、まだまだ借りがあります』とのご返事で、別の記念切手がお返しに送られてきました。次女の息子、六年生の孫は、「僕が持っていない珍らしい切手ばかりだ……」と大喜びでした。

琵琶湖での集いで。興梠さんは右端に。

昭和四十四年に夫が定年退職し、生まれ故郷の大牟田から、子供たちが就職している大阪に移転したときには不安がいっぱいでした。友人・知人も多く、弟妹との別れや人情味の厚い炭住街の人びととの別れはつらいものでした。

でも、大阪にきです。来阪して十四年、三池闘争のときには高校、中学、小学校の一男三女の子らは発育盛りでしたが、すでに子供を持つ親になりました。

当時、主婦会の分会長だった私は、夫と家族の理解と協力がうれしく、会員の皆さんの協力も大変ありがたいものでした。資金もなく、しかも多忙な中で次つぎに行事ができたものだと感心します。皆さんの気持が一つにまとまった結果だったと、分会長や子供会育成の役員を経験した妹（大牟田在住）たちとも、会うたびに当時の『思い出』話しとなります。

三百円のわずかな会費で、テレビ二社にも放映された笑いと涙、そして感激の集団銀婚式……。子供たちは、しめ飾り、お供えものなどをそれぞれが持ちより、神官の謝礼も節約とのことで、分会長の緒方さんが神主さん風に大声で「のりと」を唱えると、厳粛なときなのに吹き出しそうな笑いを噛みしめる。隣を見たら皆さん同じで、あとで大笑いとなったことなど、今では考えられないことです。

子供会自身のアイデアでグループ毎こいろいろなおしげを作り、